



俳諧古今抄

再撰貞享式
日久一



非
爲
文
包
鈿

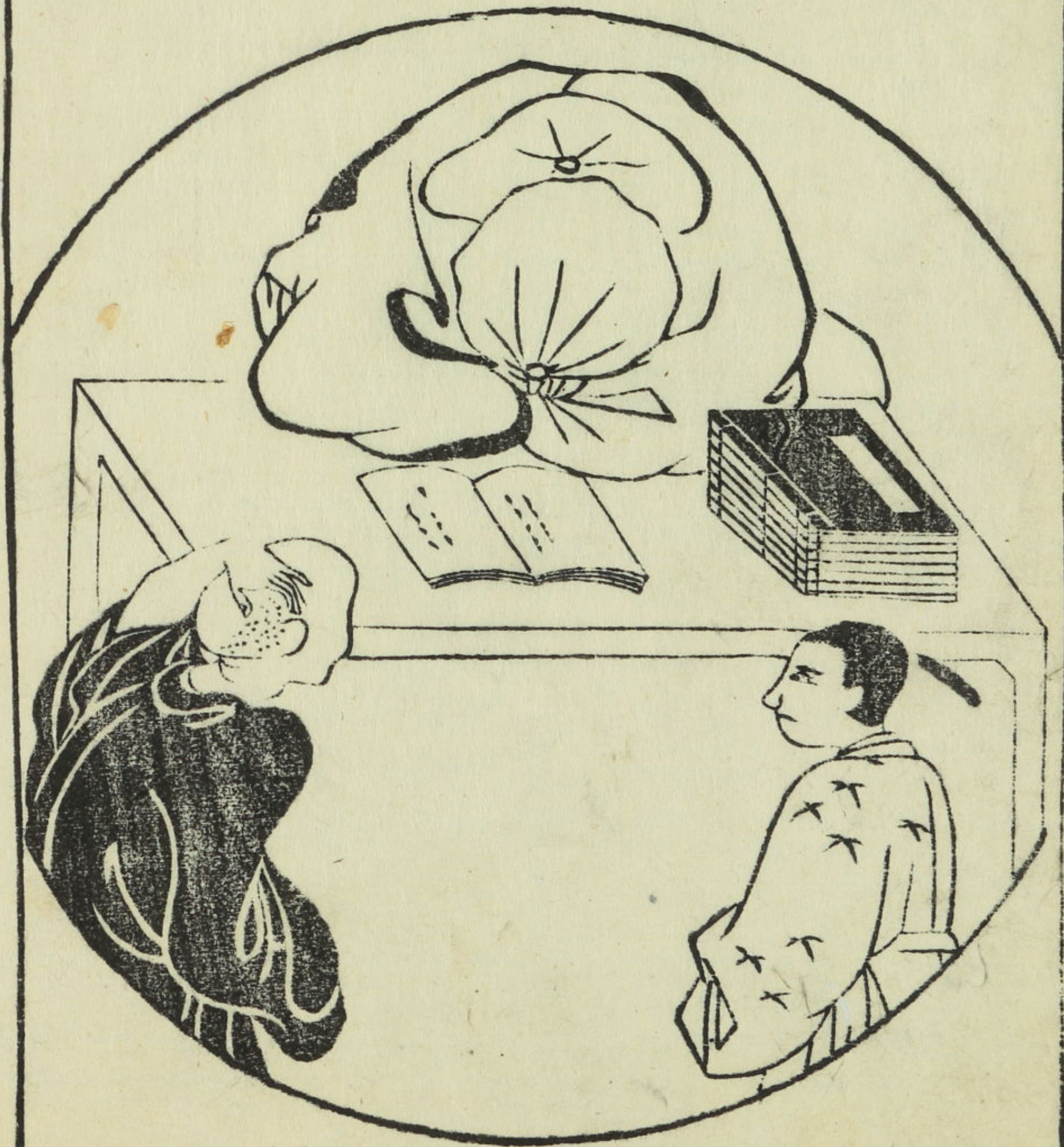


14

15

16

家類圖



他部古今抄巻之上

物志序

蓮二房

今以他部古今抄巻之上
 一滑程首此子と記 孔内の六程に名とありて
 下訓諫の一道と記し一素限の諫をもしし名と
 稱して滑程首の女は能諧のこころとて了平程一決
 の中又あるより儒師を弄のしりていふ所は諫矣
 と名前の秘法にありていふ所はたれと名ありしと
 記してしりていふ所の名はたれと名ありしと記

こころの所録と二冊とこころの巻と一部
 又冊あるをばく題号は建てるふとては連歌と
 してはあつたや中右に詠諧と連歌にゆかして
 遠く古代の階級とたつて近しく今日の詠諧と
 ひらちるべし詠諧古今おこる各所なるらひ
 ちとく一部のこと地とつたは詠諧と古
 とく千系一斬の秘訓あるは所古とて
 こととくあつたこと一乃西断の詠ありて
 連歌の両式より今とつていふこと
 和歌此式とすねありて詠言連歌の義ふのあらは

公家殿上の詠集とらるる士農工商の詠とて
 へんことわいば詠調とあつて（シラベキ）持巻に
 とあつたこと今に詠諧の用とて枚子とて規
 のきとていふやまうの連歌といふことあつて
 は一詠集といふことあつて今に詠諧の詠
 とて一冊とて今に詠諧の用とて枚子とて規
 とらるる一冊とて今に詠諧の用とて枚子とて規
 詠と論とて中右の詠集とて詠言の式と
 とて一冊とて今に詠諧の用とて枚子とて規
 とらるる一冊とて今に詠諧の用とて枚子とて規

一 三テ用オハ其人ノ不自在トハ今ノ式ニ人ヲ弘明セスホカ古風ノ偏屈ヲ山明トナリ或ハ先師ノ再撰ノ下ニ覺知是トハ弘經ノ如是我聞ニ減後ニ再撰ノ折言語ナリ
 一 此抄ニ證句ヲ采ルニ系ヲ定テ各乗ナキハ總テ祖翁ノ證句ナリ系ヲ定メズハ此印ヲ書テ直ニ送書ナリ多ハ先師ノ證句ナリ但シ別人ハ句下ニ其名アリ
 一 此抄ニ里園ノ印ハ總テ文法ト句格ナリ然レテ文字ノ傍ニ隔テ白園ノ印ハ或ハ切字ノ節目ト知ヘク或ハ對語ノ相致ト知ヘク或ハ段ノ要文ト知ヘシ
 一 此抄ニ古式トハ多ハ連系ノ兩式ヲ指シ古抄トハ貞徳ノ

佛舎ヨリ埋木噓州ノ類トト一部ニ埋木ノ名ヲ指ナル師資ノ辭讓ヲ案ホスキナリ或ハ稀ニ本式ト云ル今ノ貞吉子式ノ本々ヲ指テナリ
 一 此抄ニ異名異躰トハ或ハ牡丹ヲ汝見草トハ異名ナリ牡丹辭トハ異躰ナリ或ハ音訓ノ差別トハ自雲ヲシラケモト云フ凡各異ニシテ躰ハ同シ此故ニ異名ト云イ異躰トト云ル今ノ式ト古抄ノ透目ナ箇條ノ古法ノ下ニ悉知スヘシ

再撰^ニ貞享式序^ヲ 並目録

東大寺坊

貞享此じうけ式目と申右の記譜と今此記譜
 とこと如る汝者其の事とひあるより白馬の記譜
 とことりて始と七又條とひらあ後と記し九條
 とあるもちうお十九條と今此式目也らるる事
 の成辰らるる福の祭酒とてつとをの向此撰を
 此譜の時代とありし記とて貞享式と題と
 い後後し人の称名ちる也とてく一部の記
 とるあらも此を人の御筆と申しらるる事とて此

の御本とてりて此言連治の所とてとて此譜
 いまも汝者其の論のよりて士農工商の人とてひ
 下字ら達の今言より保中此所とありてん
 と也らる十九條の裁断と記譜の字論とて
 下者向し此字の事とてん服の初字も才とて此
 遠はし記花八月也あらひも此字もとて同各
 異用の記あるもとてん今とて古の各同ありて
 い今式の書用とてりてとて我々の建流とて
 此とてん事とてりてとてん事とて書の新稿
 いか此とてん事とてりてとてん相款の事とて

あり或るときは消されたりあり等して時を
 入むるに口換ひの法に在るに於て再撰
 の場よりいへばおそむに程をりまこと能
 算角のあやとりをいへばやまるとし竹符のま
 あんふと鬼國の舞のたとへておそむこと此
 達をらんら算七草の編圖ありとていへば武路
 の右に今一編といふことたりとてたがれ
 不とい書とりて一復一復の算とてとて
 右にといありと能算の公式のたがれとて
 右にといありと能算の公式のたがれとて
 右にといありと能算の公式のたがれとて

近くといはば算の形とありて能算の
 論よりいへば互備の交とてなりけ
 談笑の用ありとていへば算の
 こととていへば算の形とありて能算の
 のこととていへば算の形とありて能算の

寶永七庚寅十月二日

貞享式目録

大段ハ本式ノ目録ナリ
小段ハ再撰ノ附録ナリ

- 一 俳諧と誹諧ノ字論也事
- 一 他諧と諷諫の道ある事
- 一 六義ノ今の和訓也事
- 一 冬後句ノ切字也事
- 附 心切の事 中切の事
- 附 挨拶切の事
- 一 切ノ二種の差有る事

- 附 二字切の事 三字切の事
- 三段切の事 二段切の事
- 一 心切ノ多々有る事
- 附 とほりの事 下ほりの事
- 大廻の事 玄切の事
- 一 押字と抱字也事
- 附 句讀切の事
- 附 無名切の事
- 一 二品のうゑ也事
- 附 浮哉の事

欽哉のり

一 八のちのり此事

附 ちのりのり

一 此のりのり

らん此のりのり

一 百龍の表八句此事

附 發句のり 服の龍子のり

才のり 手余波のり 四句句のり

一 四折の曲節此事

附 転向と句作のり

撰集のり

一 月花此事

一 指合と去嫌此事

一 意句此事

一 季の節の踏くる物此事

附 二季の季 四季よりり物

一 季の二季の向去るのり

一 季とあるの季とある物此事

一 各取の雜の發句此事

附 新躰のり 四季格のり

詠諧のり

古今抄

- 一 四季の各名類此事
- 一 他諸の段各遣此事

惣合十九條

古今抄序目終

再撰貞享事

目之一

古今他諸序

芭蕉庵

於て我らの他諸を二子歳のじうし各ありて
 周奉の比より諷諫とあらは漢魏の向く終矣と
 いろむれん史記とこれの詩書よりなれへて
 和漢の風雅の一ととをあれりきりあらに中心は
 の誦讀と子と應安の新式とけとあらし慶長
 の御年しいろよりけり指合と中より一と嫌と
 せむむらふとてん世の公亦とあらして東漢の

古今抄

十一

不自在しつて一けぬし能或とひそくに机前の
二と子とらとて下彼不浄筆より嘯州のこき
七とくまらとらとて控まらとて山がより耳目の
公るあんとらとて取捨と一字の私あぐ今や一程此
裏はより近く一世の冥義と雲の遠く百世
の明也とらとて天理の冥合とやんすもや
とてまらとて一知の授記とて一は式めあともくま
は式の名とらとていさる命

貞享五年辰子西春如言日

再撰貞享子式

○能諧と誹諧と字論此事

むらり能諧と誹諧とと和歌の家と字論
あれと能子史記の素隠し僧能皆獨能諧とら
能ちり能文ありとてははく此評林と誹諧の所
いかにてありとらと能おの中心とて延喜の御代此
古今集しけり能誹諧の二子とて和歌の二解
とあるとらと拾遺集しは二子と用ゆん漢と
同名の能諧とらと能誹と別名の能諧とらと能集

し歌假名をかきわかれいさるもあつねとて昔より
て詠諧イハヒくしよとまされいしりて風物のおき
きりりらとあつねはあつねおとと解し九不あり
て詠諧イハヒ二つ詠諧イハヒ三つ詠諧イハヒ四つ詠諧イハヒ五つ詠諧イハヒ
は輔の奥後おしよめて宗祇のきりまうと詠ハ
甫尾ゆりて詠ハ朝寄ゆとあれは詠諧と詠諧を
ふるるうと詠諧の非比旨あるとふるもあれは詠
より代くし詠の子と用いあつねは比旨ゆりより
てなとあつねふあれは比旨と對しつて詠諧を
つてゆられとるの秘訣といひつ詠諧は詠諧

つてつてつて

東巻云△角撰カクセンよりんけい詠をほとく人偏の
詠字しつて一宗建まのま地とてなれ
矯世憤俗キョウセフンソクとてるまをの書は過當とほり
て他りて詠諧をまへつてとて例し我々の
詠言ちりてとてつて詠論より連まれば式詞
のつて詠諧の名とてつてつて今つて詠諧は
當用とてつてつて大異の故とてつてつて
つてつて詠諧の遊戯イハヒちりときつてつてつて
詠諧の空に戯ちりとなつてつてつてつてつて

詠諧

つて

とせ用ととましくいふは自ら言ふ事なり
さういふことありしは文字言説のふかき
はつらつ也

○他語と諷諫の通あり事

天地ととにけりきや後天なるあり地なるありと道
よりみたりと人なることなりと人向
の私よりするに物の中よりある事なりと
悪るるにあらむと和加と悪くともなりと
まじりぬみんを愛とともなりと現在とともなり

はつらつは揚墨のまはつらつとてはつらつと術の
るくまうと世居と商の家業ととてはつらつと
の以雅とありと人向の世にともなりと
中より他語の二るるは後史と備註の各あり
周妻とむしりともなりとあらむと和加の
もはつらつとてはつらつとてはつらつと
るありとはつらつとてはつらつとてはつらつと
道に名をたの高きとてはつらつとてはつらつと
とやうけて諷諫とてはつらつとてはつらつと
法とありと世にともなりと用とともなりと

諷諫し諫めし情物育し楚詞の諷めりや
 してさしむとあれせはと又倫の和と本
 君父の善とともくはんも婦弟の悪と
 善と善と悪と悪と直言とあり直諫
 されいし時と人の機嫌とやうたれと
 大なるもつやせむれむいり悪王とい
 ぬれとありはんとめれ悪と善とあり
 儒仲の二言一感執きしれり或は善
 日しありやと殿村のともく悪王と
 悪とありて比干の腹とまらりて
 人の肝

とけくはんにんむと人向の善悪
 十方偏照の光ぬとくあらはれ
 とありと人の中けて我をひり
 けぬ楚の子西と悪王の供と
 諫めより楚王の悪とちやう
 子との儒仲のま子も諫官の
 とあり最上とありか子西と
 儒家も仲の提督とあり
 うぬとくまりてと善人とあり
 教せるとれま子も大なる
 諫めと

のり、歎れしけれ、直諫よ、人せむせつて、古今
 と、あふ人の、しるし、と、ふさ、の、ま、ん、ま、れ、の、他、浩、の
 る、と、子、を、治、國、齊、家、の、一、助、う、し、に、臣、と、さ、さ、る、人
 又、倫、と、や、り、も、ん、ん、の、儒、仲、の、大、人、と、さ、さ、る、人、あ、ま、知
 へ、ま、と、ま、と、け、詛、諫、ち、り、へ、し、者、に、あ、り、ん、に、口、辯、う
 瑯、人、の、正、諫、の、明、節、明、節、不、可、以、久、安、也、故、
 詛、諫、の、取、容、と、と、世、替、り、詛、諫、の、内、科、と、は、く
 世、文、と、諷、笑、の、お、祝、と、と、さ、ら、り、う、世、に、他、浩、と、さ、さ、る、人
 へ、ま、と、ま、と、け、詛、諫、ち、り、へ、し、者、に、あ、り、ん、に、口、辯、う
 ま、と、ま、と、け、詛、諫、ち、り、へ、し、者、に、あ、り、ん、に、口、辯、う

け、の、り、う、た、ら、し、む、者、相、以、州、の、そ、と、ま、り、一、言、の、下、に、着、破
 一、一、歌、人、連、音、に、指、讓、と、あ、り、う、ま、と、ま、と、け、詛、諫、ち、り、へ、し、者、に、あ、り、ん、に、口、辯、う
 ま、と、ま、と、け、詛、諫、ち、り、へ、し、者、に、あ、り、ん、に、口、辯、う
 け、の、り、う、た、ら、し、む、者、相、以、州、の、そ、と、ま、り、一、言、の、下、に、着、破
 一、一、歌、人、連、音、に、指、讓、と、あ、り、う、ま、と、ま、と、け、詛、諫、ち、り、へ、し、者、に、あ、り、ん、に、口、辯、う
 ま、と、ま、と、け、詛、諫、ち、り、へ、し、者、に、あ、り、ん、に、口、辯、う
 け、の、り、う、た、ら、し、む、者、相、以、州、の、そ、と、ま、り、一、言、の、下、に、着、破
 一、一、歌、人、連、音、に、指、讓、と、あ、り、う、ま、と、ま、と、け、詛、諫、ち、り、へ、し、者、に、あ、り、ん、に、口、辯、う
 ま、と、ま、と、け、詛、諫、ち、り、へ、し、者、に、あ、り、ん、に、口、辯、う
 け、の、り、う、た、ら、し、む、者、相、以、州、の、そ、と、ま、り、一、言、の、下、に、着、破
 一、一、歌、人、連、音、に、指、讓、と、あ、り、う、ま、と、ま、と、け、詛、諫、ち、り、へ、し、者、に、あ、り、ん、に、口、辯、う
 ま、と、ま、と、け、詛、諫、ち、り、へ、し、者、に、あ、り、ん、に、口、辯、う

のさねと誣借にかゝるも五七此句法と言語の
あるいふて例の誣諫とあり公道とあり例此
諷笑とあり公法とありと一と一と然るの建る
不^レく式目と世く此無議よりなる也

東老云け一語の要文と信仙の事此は遠と
誣^レ孫老の人此高峯と誣^レ一能借とあり
世にの隨一とありたことと建所のきと地と
ついで下字に建の用とついで文章此虚字とい
うに勤破ま^レ一は^レあ^レく^レた^レの^レ大言の
孫子の虚誣の事と此は^レ似^レた^レ天道

の夫とよくま^レり^レ人道の^レと^レは^レま^レく^レた^レん
虚字の虚字といふは^レい^レつ^レは^レあ^レく^レた^レん
能借の様を^レて^レは^レま^レく^レた^レん能借の
高峯あり

○六義我^レ今^レの和訓此事

詩^レに^レい^レふ^レま^レり^レた^レは^レは^レま^レく^レた^レん
我^レ今^レの和訓此事と^レは^レま^レく^レた^レん
其の跡とあり^レ以^レ賦^レ比^レ興^レ雅^レ頌^レと^レは^レま^レく^レた^レん
各目より^レ以^レ雅^レ頌^レと^レは^レま^レく^レた^レん

中ありて先と我々の愛護しつゝあり

風

訓義我ニ凡トハ詠諭ナリ愛ニハ言ト訓スレバ和歌ニ
ハ副歌ト訓レタト比興ニ賦ニ節ハレモ詩曰凡者
多出於里巷歌謡之作男女相與詠歌各謂
其情周南召南親被文王之化ニ言句為凡詩
之正經云然レハ其国其人ノ凡俗ノ善惡ハ凡謡ニ
依副ナリ羞ムル故ニ凡化トモ註セシナリ○今按スルニ
凡化モ凡俗モ總テ詩歌ノ詠諫ニテ上ノ所化曰凡
下ノ所習曰俗トモ上ハ凡化下下ハ凡刺上トモ云ヘリ
何レモ時代ノ凡謡ニテ録名ノ代ニ葛蒲ノ謡ヲ作りテ

雅

其代ノ俗樂ヲ刺スレ類ナリ○獨按スルニ我家ノ訓
美ニ凡諭ノ二字ノ意ヲ連ヒテ諭言凡訓スキヤ
然ラハ俳諧ノ字ト成セ凡諷諫ノ和モ叶フヘンカ
去レ凡名ノ太騷トハ此等ハ百世ノ明鑑ヲ待ヘシ
訓美ニ雅ハ正ナリ直ナリ愛ニ正言ト訓スレバ和歌
ニ直言歌ト訓レタト平語ノ徒言ニ紛レヌレシ
俳諧ハ音訓ノ響ヲ憚ルヘシ○今按スルニ凡雅ノ二賦
ハ漢土ニ詩經ノ所成ニシテ凡ハ虚ヲ以テ天ニ起リ雅
ハ實ヲ以テ地ニ止ル詩經ハ此ニ美ニ濫觴シテ乾坤ノ
二美ト成レリ故ニ我家ニハ凡雅ヲ虚愛ノ二用

頌
 上見テ以ニ懲惡ノ虚ヲ用イ雅ニ勸善ノ実ヲ用
 六雅ニ正直ノ意ヲ汲テ公言大ホヤク氏訓トスキヤ也等
 八異名同賦ノ例ニテ一世ノ衆議ニ據ヘキナリ
 訓美ニ頌ハ稱ナリ義ナリ爰ニ祝言ト訓スレ和歌
 ニモ祝言ト訓レテ引歌モ給ル所ナレ然レ詩序
 ニ雅頌ニ賦ノ様ト下雅ニ国家ノ諷諫ヲ令口ニ
 頌ニ君父ノ壽量ヲ祝レテ神ニ告ル意ハ勿論ニヤ
 也故ニ六美ノ引歌モ頌ノ賦ノ明ニテ其外互各
 ハ筋ハレ今按スレニモ詩ニモ雅頌ニ而朝廷郊廟
 樂歌之詞其詔和而存其美實而密正

賦
 之於雅以大ニ其規和之於頌以要其止也
 詩之大小皆也然レ六雅頌ノ二用ヌル外ニ在密ノ
 次ヲ備ヘテ諷諫ノ正直ヲ行ヘ内ニ和實ノ情
 フ含ミテ詩序ノ優美ヲ調ヘレ爰ヲ孔子ノ言
 給ル文王ノ文ニレテ孔子ヲ我家ノ太祖ト成荒自專ノ
 和節モ也謂ナリ之經ハ例ノ温厲ヲ知ヘキナリ
 訓美ニ賦ハ鋪ナリ量ナリ爰ニ六美言ト訓スレ和歌
 ニモ美歌トアリ又選ノ季註ニモ衆事明白也
 ト云ハ眼前ノ物ヲ美並テ直地ニ姿情ヲ演ルノ
 謂ナリ定家卿ノ叙文ニモ賦ハ歌人ノ本意ナリトハ

四季三月雪ノ姿相ヲ詠シ花鳥ノ優游ヲ知レト
ナリ賦ハ賦ニ文章ノ惣名ナリ

比

訓美ニ比ハ比喻ナリ又ニ准^{ナツラフ}言ト訓スヘシ和歌ニモ
准歌トアリ^{ナツラフ}比物比貞トハ詩人歌人ノ優情
ヲ指ヘテ貞ニモ木ニモ物ヲ言ハス類ナリ或ハ韻書ニ
比テ子ヲ為罪案ナリ比ハ於物^{ナツラフ}貞^{ナツラフ}托事於物^{ナツラフ}比
云ヘリ○今按スレト貞トハ姿情ニ先後ノ心得アリ
比ハ物ヲ取テ其姿ニ准テ貞トハ物ニ托テ其情ヲ起ス
物ヲ催スト物ニ催スト自他ノ差別ヲ知ナリ也詩ヲ
他語ノ微中^{ナツラフ}氏解^{ナツラフ}於^{ナツラフ}氏云キナリ

興

訓美ニ貞トハ誘引^{ナツラフ}美ナリ又ニ誘言ト訓セシ和歌
ニ^{ナツラフ}喻^{ナツラフ}平ト訓スレト凡比ノニ訓ニ然レ然レ貞トハ貞字
ト凡字ノ和訓ハ美ノ中ノ太^{ナツラフ}騷^{ナツラフ}ニテ^{ナツラフ}我^{ナツラフ}内^{ナツラフ}ノ^{ナツラフ}象^{ナツラフ}義^{ナツラフ}ハ
知是レト百世ノ明^{ナツラフ}監^{ナツラフ}ヲ^{ナツラフ}恐^{ナツラフ}キ^{ナツラフ}ナリ○今按スレニ貞トハ
一美ハ和^{ナツラフ}後^{ナツラフ}トモニ^{ナツラフ}今^{ナツラフ}明^{ナツラフ}ナラヌヤ去^{ナツラフ}レ^{ナツラフ}論^{ナツラフ}語^{ナツラフ}ノ^{ナツラフ}陽^{ナツラフ}位^{ナツラフ}見^{ナツラフ}篇^{ナツラフ}
ニ子路ニ詩經ノ凡流ヲ勸テ詩^{ナツラフ}以^{ナツラフ}テ^{ナツラフ}可^{ナツラフ}興^{ナツラフ}トハ四季
ノ月雪花鳥ニ誘^{ナツラフ}レテ^{ナツラフ}優^{ナツラフ}游^{ナツラフ}ノ^{ナツラフ}情^{ナツラフ}ヲ^{ナツラフ}貞^{ナツラフ}ト^{ナツラフ}ハ
謂ナリ然レテ例ノ朱註ニ^{ナツラフ}發^{ナツラフ}起^{ナツラフ}志^{ナツラフ}氣^{ナツラフ}ト^{ナツラフ}ハ
云捨レハ孔子ノ宜給^{ナツラフ}フ^{ナツラフ}似^{ナツラフ}而^{ナツラフ}非^{ナツラフ}ナル物ニヤ興ハ
決シテ遊貞ノ貞ト註スレシ詩者人心之感

乙亥の御歌とてこれや若くして保台物の名は
 としとてさうやけ格となし新制なれぬ御
 へ向のやうにまじり或は給の類とてけり給ふ
 伴歌とてあつて方々へけりたれとて
 書られしとて書られし御とていこと敵討と
 これとて再撰の御句なれはけりたれと
 或は連歌とて流傳へしとて能くしありて
 西家の御句の書いぬあれとて論とていふ能く
 る御歌なり。今接するに連歌といふ月市の御
 句とあがりて御歌をまじりていふことし能く御歌

御歌の御句とあがりていふのまじり御歌をいふのこゝま
 いさくは月市と御歌の御句ありりや御歌を
 入るまじり御句といふこととて能くしありて
 御歌のこゝまらりていふことし

月市といふは。山ありていふこと。御歌。
 梅の葉。はりていふこと。御歌。

前集とて武江の集にさう歸念の御歌の御歌
 けり御歌をいふこととて御歌といふこと
 といふこととていふこととて御歌といふこと
 といふこととていふこととて御歌といふこと

二返切 夕まほのあまはらうとくはのこ

夕まほのあまはらうとくはのこ

夕まほのあまはらうとくはのこ
夕まほのあまはらうとくはのこ
夕まほのあまはらうとくはのこ
夕まほのあまはらうとくはのこ
夕まほのあまはらうとくはのこ
夕まほのあまはらうとくはのこ
夕まほのあまはらうとくはのこ
夕まほのあまはらうとくはのこ
夕まほのあまはらうとくはのこ
夕まほのあまはらうとくはのこ

夕まほのあまはらうとくはのこ
夕まほのあまはらうとくはのこ
夕まほのあまはらうとくはのこ
夕まほのあまはらうとくはのこ
夕まほのあまはらうとくはのこ
夕まほのあまはらうとくはのこ
夕まほのあまはらうとくはのこ
夕まほのあまはらうとくはのこ
夕まほのあまはらうとくはのこ
夕まほのあまはらうとくはのこ

夕まほのあまはらうとくはのこ
夕まほのあまはらうとくはのこ
夕まほのあまはらうとくはのこ
夕まほのあまはらうとくはのこ
夕まほのあまはらうとくはのこ
夕まほのあまはらうとくはのこ
夕まほのあまはらうとくはのこ
夕まほのあまはらうとくはのこ
夕まほのあまはらうとくはのこ
夕まほのあまはらうとくはのこ

ふとあつたおとよはしはあつたおとよはしはあつた
の儒佛の書も各月と初子のきくらけくらけ
あつたおとよはしはあつたおとよはしはあつた
おとよはしはあつたおとよはしはあつた

まぐさあつたおとよはしはあつた
まぐさあつたおとよはしはあつた

あつたおとよはしはあつたおとよはしはあつた
あつたおとよはしはあつたおとよはしはあつた
あつたおとよはしはあつたおとよはしはあつた
あつたおとよはしはあつたおとよはしはあつた

あつたおとよはしはあつたおとよはしはあつた
あつたおとよはしはあつたおとよはしはあつた
あつたおとよはしはあつたおとよはしはあつた
あつたおとよはしはあつたおとよはしはあつた

あつたおとよはしはあつたおとよはしはあつた
あつたおとよはしはあつたおとよはしはあつた
あつたおとよはしはあつたおとよはしはあつた
あつたおとよはしはあつたおとよはしはあつた
あつたおとよはしはあつたおとよはしはあつた
あつたおとよはしはあつたおとよはしはあつた
あつたおとよはしはあつたおとよはしはあつた
あつたおとよはしはあつたおとよはしはあつた

といふおて千六の字をばりより字をばり
 しほふとあげおていふはむをばりといふ
 といふといふやうに再撰の場へおておて
 一巻の刷新とありい哉字よりいふの字といふ
 耶字といふ字の字をばりいふ月日の説を
 ちかぬといふ多きをいふといふいふいふ
 八十載といふ紹聖の五百ヶ條といふいふ
 百千一億といふといふといふいふいふ
 各おとすといふといふといふいふいふ
 といふいふの位説ありいふいふいふいふ

けり或月の増減あるらんらんをいふいふの撰詞
 といふといふ苗の即命ちりいふいふいふの撰詞
 といふいふやうに遺稿の大任といふ用撰
 例の案簿よりいふいふ

桐の字より 乾師 ちり 桐の
 桐の字より 桐の字より

といふ乾の一字より田兵の所をいふいふあり
 といふいふいふいふ家の富貴といふいふいふ
 ありいふいふいふいふいふいふ桐の字
 といふいふいふ桐の字よりいふいふいふ

桐も鶴もあつて田舎と行まらるる存のれ
 鶴もあつて句と切つて塙の由と陽いとも
 あつて没や鶴もあつて句の比と古歌の兼入
 ろりともやうかあつて此傳と神とを遠く
 田舎のまゝ傳といふやうに桐のあつても
 とあつていふまゝとやうにまじらると感入
 の難しきやうに存らるるやとあつていふと
 物うわと此論あつては句と極のまじり
 とらりやと所用の語あつてやと鶴と解
 うと桐と句作の用とらつてはまゝと極の極

のいふ官家と極はのさあつて桐と田舎の
 富もあつて物やまゝとやうにまじり桐と
 時々の介とまゝとやうに桐のまじり
 暖かい層柿舎の懐かあつてはあつて
 去まると武門の功とさげつては軍人の名と
 称とらつては陰用とさうらつてはさう
 かのまじり傳と極のまじり富富の二様あり
 今世不帯の傳とあつてはまじりとも
 られは軒梁の向とまじりとも大石の層
 あれいむと此様とまじりとも例の証

とはくもるや△再撰よりんけつと和歌の
 我あしくあくふ。めいしきく或をらひきよしとの
 うまきふとせまうくと通例あれしは廿二章
 いらぬのり一切りく切るともふかれといふ
 抱字も軒回のこと味とあるまもせとわまは
 の曲らやふくむまけけつとふらふらふら
 初名の書といじくして萬好とあねいふ
 どの書りと例一通途のまうとあれいふ
 一今世もまうくとわらわいゆるとあ
 或は古抄の各目は大廻といひま抄ゆとあ

うあつとに合のあつとつれの抄向とらあはく没や
 玄物の各れと書らりり我家の書月とらあはく
 一れと霞議の用捨あんう。う格もるんま抄とあ
 切字とらしく極むう。一は格とらあはく各目
 いあしとらあはくつとあれい和歌しす抄にすあ
 の各あらう書と書とらあ極むし行中廻書は
 此あれい面白辨とらあ極むし一面白曲は
 一極むしとあ名の次申ありつれの和歌しす
 ああしつれの能造と面白あはく一格の
 久しあはくはあはく貴物のあはくはく

もろくも一節一節と我く我差ふるむしけなる和歌は新
しくも有一節一節と見様辨し以下のふるるあり
とまじり抱ありとあるんを伴うれば一もやあつて
大廻しと云妙もら切の棟即ちんふ東と名有り
句段よりもとの名付ふとちくもと物名を
大まうりさしり或を町心所着せ自ら切子
不あられし名有りを怪し名有りんふ中名地
し名有りといふらりてあつてと云あつていふも
もろくも一節一節と名付ふ古来の神句にあつても和歌の
名有りといふ一節一節と名付ふ古来の神句にあつても和歌の

ら切のりひかりとありても昔の人共實にやあつて
はれやあつてと云あつてと云あつてと云あつて
物れをれは他行の對しての語とていふはらむ
万端し万端いしるものさむりあつて言深不到の
名あつてと云あつてのや有りていふべ

東卷云世能と村と曠莫う一丁例のあつて
路ありていふもあつてと云あつてと云あつて
神句と云あつてと云あつてと云あつてと云あつて
て神句と云あつてと云あつてと云あつてと云あつて
孫言ちりや但し例の多きをいふ

あらしのふりかぜにまはるるをよみてははるの
秋さきりかたをりそをよみおろし銀詞の比を
連言此艶詞よあらしのふりかぜとあらしは他浩の
曲意にふくむはらあらしは格と常他の比
よし無のふりかぜをよみおろしとあらしよみ人
業のしよあらしをよみおろしと白鳥の文章訓と
常他の比と厚きかたをよみおろしは所の歌と後
あらしよみかたをよみおろしは所の歌と後
秋のふりかぜよみおろしは所の歌と後
の他九條ありて終は尾と詞とよみおろしは
尾

ひよふとちかむはははと文章のいあらしは
もきしあらしよみおろしは所の歌と後
他浩と十七子の終りありあらしをよみおろしは
和言此後終りありあらしをよみおろしは
のあらしよみおろしははははと文章のいあらしは
あらしよみおろしはははと文章のいあらしは
よみおろしはははと文章のいあらしは
へ換家の詞とあらしをよみおろしはははと文章のいあらしは
玄妙
あらしよみおろしはははと文章のいあらしは
あらしよみおろしはははと文章のいあらしは

お月よ我けしき事と誤るにちゆふに事あり
 して居しりの中居しり下居しをせ大なり世
 ちたれしけしき事とち居の筒し切りて居し
 ち或れ月よあり梅あり或れ夕日此居句
 して何れ或れ秋日の者句し何れ居し
 居秋の朗詠しりありし居し居の事あり
 あり或れありと詠嘆の余居と短くして居句の
 居し居句ありとあり居しやま此まして居句の
 居し居しあり居し居し居し居し居し居し
 人の居し居し居し居し居し居し居し居し

ことし神物の居し居し居し居し居し居し居し
 居し居し居し居し居し居し居し居し居し居し
 の詞と居し居し居し居し居し居し居し居し居し
 居し居し居し居し居し居し居し居し居し居し
 居し居し居し居し居し居し居し居し居し居し
 の居し居し居し居し居し居し居し居し居し居し

自字式りく一終

